

医療と生活の向上をめざして

— 化学療法のはじまりと患者運動 —

太平洋戦争が終わり、プロミンなどの薬の登場によってハンセン病は治るようになりました。患者さんたちは「治る」という大きな希望を持ち、隔離によって奪われた権利を取り戻そうと立ち上がりました。

それぞれの療養所に、患者の自治をめざすグループがつくられ、やがて全国組織となつて、医療や生活の向上を求めました。また隔離を定めた法律を改め、差別的に使われてきた「らい」という病名を「ハンセン病」に変更することや、家族を社会の偏見から守ることなども要求しました。



癩予防法の改正を求めてハンガーストライキ※をする患者たち（大島青松園 1953年）
※食事をとらないことで抗議の意思を表す

療養所にはいろいろな出身地、症状の人が暮らしていたので、日本国籍のない人や失明した人たちのグループもでき、平等で暮らしやすい場所になるように働きかけました。

現在私たちが目にする療養所は、こうして少しずつ整えられてきた姿です。